聖句　マタイ 28:5「復活の三つの謎」

天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」

いまから 1200 年以上前、イギリスのノーザンバーラン州にリンデスファーンという大修道院がありました。これが西暦 875 年にバイキングの襲撃を受けまして、徹底的に破壊されました。修道士たちは聖カスバートの遺骨を持って逃げたんですが、骨なんて何の役にも立たないのにと思いますけど、修道士たちはダラムというところに新たに修道院を築き直して、聖カスバートの遺骨を安置しました。ダラムにはいま大聖堂があり、大学がある、立派な町となっています。もしあのとき、バイキングが最初の修道院を破壊したとき、修道士たちが絶望していたら、今日のダラムは無かったのです。なんで骨なんて持って逃げたのか？　それは、復活を信じていたからです。キリストが復活したごとく、キリストに結ばれた聖カスバートは復活する。キリストに結ばれたすべての信者が復活する。こういう復活の希望があったから、修道院を築き直すことが出来たんです。

今日わたしたちは、主イエスキリストの復活をおぼえて、つどっております。主イエスの復活をおぼえるというのは、二千年前の過去を振り返るということではない。過去を振り返るというんではない。イエスさまが復活なさった朝、天使は墓穴を指してこう言ったんです。「見てごらん。イエスは墓の中にいない。復活したのだ」　実にイエスはいま、生きていたもう。

イエスが十字架につけられ、死んで墓に葬られた。それで終わり。それで終わりだったら、これは確かに二千年前に終わってしまった出来事だ。終わってしまった出来事であるなら、わたしたちに出来ることは、過去を振り返ることだけだ。二千年前に終わってしまった出来事を振り返るだけ。それしかわたしたちは出来ないことになる。

だが、天使は何と言ったか？　「イエスは墓の中にいない。復活したのだ」であります。イエスはよみがえって、墓から出て、生きている。いま生きていたもうのであります。この、いま生きているイエス、復活者イエスであります。そうすると、わたしたちがなすべきことは、二千年前を振り返ることではない。昔を振り返るということでは全然無い。いま生きていたもうイエスとお会いすること。これであります。

牡蠣を食わず嫌いというひとがいる。どうしたら牡蠣のおいしさがわかるのか。大昔の貝塚を掘り起こして牡蠣殻を集めて洗ったら、牡蠣のおいしさがわかるのか。わかりません。図書館へ行って水生生物の図鑑を片っ端から読破して牡蠣を研究したら、牡蠣のおいしさがわかるのか。わかりません。だが、牡蠣を実際に食べてみれば、牡蠣のおいしさがわかる。

わたくしの家内の母方の曽祖父は明治時代の弁護士でありまして、大変熱心なキリスト信者でした。もう弁護士の仕事そっちのけで伝道に励んでいたような人だ。ある時、曾祖父が網走に教会を設立したいと願って、七人ぐらいの信者たちと一緒に聖書の御言葉を学んで熱心に祈っていた。すると、白い衣をつけたキリストが真ん中に現れたのを、集っていたひとのうち二人がはっきり認めた。三人目も気づいて「あっ、キリストさまがお立ちだ！」と叫ぶと、そのお姿は、ふっと消えてしまった。それからなお一層祈りに力が与えられ、信仰に立って祈り続けた結果、ついに網走に教会が設立したということです。いまなおその教会が残っていますけど、これなど実に「二、三人、わが名によって集まるところに、われもまたおるなり」とおっしゃったマタイ 18 章 18 節のイエスさまの御言葉とおりであります。

わたしたちは今日イエスの御名によって集まっております。復活して、いまも生きていたもうイエスの御名によって集まっているんですから、どうか今日、ここにおいて、この生ける主イエスキリストにまみえることができますように、願いかつ祈るものであります。

さて、復活の出来事というのは、わたしたちの理解を超えた神秘であります。理解を超えていてなお、わたしたちが経験し得るものであります。その復活について、三つの謎を取り上げたいと思います。その三つの謎が、わたしたちに対して今日、決定的な重要性を持っております。

第一。復活したイエスは、なぜガリラヤへ先に行かれたか、ということであります。

復活したイエスさまは、弟子たちにこうおっしゃった。わたしは一足先にガリラヤへ行って待っているよ。だから、おまえたちもすぐガリラヤへ来なさい。そこでわたしに会うだろう。

ガリラヤというところに、深い意味がございます。ガリラヤというのは、弟子たちにとって、まさに原点の場所であります。この復活の出来事に先立ちますこと三年前、弟子たちは、その多くがガリラヤで漁師をしておりました。そういう漁師たちに、イエスさまは声をおかけになった。三年前のことだ。「おまえたち、わたしについてきなさい。おまえたちを弟子にしよう」　イエスさまに声をかけられて、漁師たちが弟子になった。ですから、ガリラヤというのは、弟子たちの原点の場所であります。弟子たちがイエスさまと出会って以来、三年間ずっと寝起きを共にした。朝も昼も晩も、いつでもずっと弟子たちはイエスさまと一緒にいて、イエスさまに触れて、イエスさまの教えを受けて、イエスさまのことを、イエスさまだけを見つめてきた。三年間それをやった。その結果どうだったか。三年間イエスさまと一緒にいたのに、弟子たちは、イエスさまがどういうお方であるのか、とうとうわからなかったのであります。三年目のおわりのとき、イエスさまは弟子たちにおっしゃった。「わたしはこれから十字架にかかって死ぬよ。そして三日目に復活するよ」　だが弟子たちはちっとも理解できなかった。イエスさまが、すべての人の救いのために、罪の身代わりとなって十字架にかかり、三日目に復活するということが、弟子たちはちっともわからなかった。三年間毎日毎日ずっとイエスさまと一緒にいたのに、この最も肝心かなめのことが、わからなかった。なので、イエスさまがつかまって、ゴルゴダの丘へ、処刑場へ引き立てられて行くという段になって、弟子たちはみんなイエスさまを見捨てて逃げてしまった。あのイスカリオテのユダがイエスさまを裏切ったというだけじゃない。12 人の弟子全員がイエスさまを見捨てて逃げ去ったのであります。

だから、復活の朝、イエスさまは弟子たちに、こうおっしゃったのです。わたしは先にガリラヤに行って待っているから。おまえたち、すぐ、そこに来なさいよ。ガリラヤでわたしに会うだろう。これは、原点に戻れ、ということであります。イエスさまとの出会いの原点に戻れ。イエスさまのことを理解し損ねていた弟子たちに、「もっかい原点に戻りなさい。そして今度こそほんとうに、わたしを正しく理解し受け入れなさい。わたしは、あなたがたの救いのために十字架にかかって三日目に復活した救い主だ。そういうものとしてわたしを受け入れなさい」という第二のチャンス、セカンドチャンスをお与えになったんであります。

ところでわたしたちは、イエスを正しく理解し受け入れているであろうか。イエスキリストに対する正しい理解とは、彼は宗教家であった、ということではない。彼は偉大な教師であった、ということではない。彼は社会活動家であっ

た、ということではない。彼は預言者のひとりであった、ということではない。この「イエスこそ、わが罪のため死にたもう救い主なり、アーメン！」という信仰的の理解、信仰告白でなけりゃならない。この信仰的理解こそが、われわれの原点であります。「イエスこそ、わが罪のため死にたもう救い主なり、アーメン！」という、ここへ、この原点へ、われわれはいつでも戻って行かなければならない。なぜというに、この原点以外に、われわれがよって立つべき場所は、無いんだからであります。

第二。エマオに向って旅する弟子たちに、なぜイエスは近づいて一緒に歩き始められたか、ということであります。

復活の日の朝、弟子たちの間に大騒動が起こりました。イエスの復活を最初に目撃したのは女の弟子たちだった。女の弟子たちは興奮して走って行って男の弟子たちに知らせに行った。イエスさまが復活したんだという、恐ろしさとうれしさとで、半狂乱状態であったでしょう。こういう女の弟子たちの姿を見て、男の弟子たちに混乱が生じた。死んだ人間が生き返るはずがないじゃないか。この女たちは悲しみのあまり頭がおかしくなってしまったんだ。女の弟子たちが叫び続けるもんだから、男の弟子たちが走って墓を見に行った。すると、墓はからっぽだった。イエスのからだはどこにもない。どこを探してもイエスのからだが見当たらない。これが復活の日の朝の大事件であります。そうしていま、イエスの弟子のうち二人が、連れ立ってエマオの村へ向かって歩いていた。旅をしていた。徒歩の旅であります。歩きながら二人の弟子は、復活の日の朝の大事件について論じ合っていた。なぜイエスのからだが消えてしまったか。なぜ墓が空になってしまったか。だれかがイエスのからだを盗んだのか。論じても論じても、二人には答えがわからなかった。わからないはずです。十字架と復活の奥義に対して二人の目が閉じられていたからです。そうやって論じ合っている二人のもとへ、論じても論じてもわからない二人のもとへ、もうイエスは近寄って来られて、復活のイエスが近寄って来られて、いつのまにか一緒に歩き始めておられた。実に復活の主イエスキリストが、目の閉じられている二人の弟子たちと一緒に歩いておられるのであります。ルカ福音書にこう言われております。

「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから 60 スタディオン離れたエマオという村へ向って歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」（ルカ

24:13-16)

この二人の弟子もまた、三年間イエスのおそばにおりながら、イエスが何かわからなかった。イエスについて正しい理解を持ち損なっていた。イエスが十字架にかかって死んだというのに、それが何のためなのかわからない。女の弟子たちはイエスがよみがえったと興奮して言ってるが、復活ということがわからない。十字架が自分にとって、どう意味を持つのか。復活が自分にとって、どう意味を持つのか。それがわからない。二人の目は生物学的・物理学的な意味において、ちゃんと見えてたんです。しかし、精神的・霊的の意味において、二人の目は閉じられていた。十字架と復活ということが、二人にはわからなかった。十字架と復活のイエスが、わからなかった。だから二人は、十字架と復活のイエスをすぐ目の前に見ておりながら、ぜんぜん見えてなかった。かえって、困惑して暗い顔をしていたのであります。

「イエスは、『歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか』と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった」(ルカ 24:17)

暗い顔をしていたんだという。二人の心のうちに何の希望も光もなかったのです。だがそのことは、この二人がイエスから見捨てられていたということを意味しない。全然見捨てられてなどいない。なぜなら、もうイエスが一緒に歩き始めていたもうからだ。目が閉じられている二人に、復活のイエスは近づいて来て、すでに一緒に歩き始めていたもう。イエスは二人に親しく言葉をかけ、交わりを持ちたもう。イエスご自身が聖書の御言葉を開いて、イエスご自身が何者かを親しく示したもう。

「イエスは言われた。『メシアは十字架の苦しみを受けて、復活の栄光に入るはずだったのではないか』　そして、モーセとすべての預言者から始めて。聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」(ルカ 24:25-27)

聖書というのは、これは、興味の無い人が読んだら、これほどつまらない本は無い。何千年も前に遠い異国の外国人によって書かれた本であります。ヘブライ語という、実に理解困難な言葉で書かれている。じゃあ、二千年前のユダヤ人、ヘブライ語を読み書きできるユダヤ人なら、聖書を理解できたんだろうか。同じ時代、同じ国、同じ言葉をしゃべる、二千年前のユダヤ人です。彼らだったら、現在のわれわれより、よっぽど聖書が理解できたんじゃないか。

そうではなかったんです。この二人の弟子たちは、この二人のユダヤ人は、小さい頃から聖書に親しんで、いつも聖書を読んで、いつも聖書の説き明かしを聞いて、聖書を暗記するぐらい読み込んでいた。二千年前のユダヤ人といったら、別に律法学者でなくっても、聖書を暗記するぐらい小さい頃から教え込まれていた。そうであっても、この二人は、聖書が証しする主イエスキリストの十字架と復活ということを、理解し損なっていたんであります。何が間違っていたんだろう。もっと勉強すればよかったんだろうか。そうではありません。大切なのは、十字架と復活の主イエスキリストによって聖書の御言葉を開いていただく、ということであります。十字架と復活の主イエスキリストによって聖書の御言葉を開いていただく。わたしたちは聖書を読もうとするときに、十字架と復活のイエスさまにお祈りをして、聖書を読むべきであります。こういう祈りをすることができる。

「主イエスキリストさま。いま聖書を読もうとしております。十字架と復活のイエスさま、どうぞここへおいでくださって、イエスさまご自身が、聖書の御言葉を開いてくださいますように。御言葉を通してイエスさまをわたしたしたちの内に深く示してくださいますように、お導きください。御名によって祈ります、アーメン」

第三。復活のイエスの御手に、なぜ十字架の傷痕があったのか、ということであります。

死んで復活したら、それは、永遠の命に復活したんであります。永遠の命への復活とは、朽ちない命への復活、完全な命、完全なからだへの復活であります。そうであるのに、なんでイエスさまの両手には、十字架の釘の痕が深く残っていたのか。傷が残っていたら、痛手が残っていたら、それは完全じゃないんではないか？　イエスさまは傷を負ったまま、痛手を負ったまま、永遠に生き続けるのか？　それじゃあ完全ではないんじゃないか？

パウロはコリント 13 章の愛の歌の中で「最後に残るのは愛である」と言っております。完全なもののみが残る。不完全なものは消え去る。完全なもののみが残る。完全なものとして最後の最後に残るのが愛である。愛こそは、あらゆることの完成であり、愛こそは、あらゆることの究極の目的である。

イエスさまの両手の傷あとは、実に、愛のしるし、であります。イエスさまが、命がけでわたしたちを愛したもうという、そのことの、目に見えるしるしであ

ります。父なるおん神さまが、そのひとり子を惜しまずお与えになるほどに、わたしたちを愛してくださるんだという、その愛の目に見えるしるしでありま す。イエスさまの両手の傷痕は、愛のしるしであります。

だから、復活したイエスさまの両手には、ずっと傷痕が残っているんです。復活したイエスさまは、いま生きていたもう。両手に傷を持ったまま、いま生きていたもう。それはどういうことか。わたしたちを愛して、いまなお愛し続けていたもう、ということです。愛のしるしである。「わたしはおまえの罪を身代わりに背負ったよ。わたしはおまえの代わりに十字架にかかり、死んで、陰府にくだり、三日目によみがえったよ。わたしがおまえの罪をすべて、わたしの命をもってつぐなった。おまえの罪は赦されたよ」という、そのことの目に見えるしるしが、イエスさまの両手の傷痕であります。

その傷痕を見て、信じてごらん。そうイエスさまはおっしゃる。なんで信じないのか。わたしの両手を見てごらん。この十字架の傷痕を見てごらん。おまえの指を、釘のあとに差し入れてごらん。おまえのために、わたしは死んだのだ。そのことを信じてごらん。そうイエスさまはおっしゃっている。

それがヨハネ 20 章 27 節の意味であります。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」

このイエスの招きに、わたしたちは応答するべきであります。「アーメン、主よ、信じます。あなたが、このわたしのために、十字架にかかられたこと。あなたが、このわたしに命を与えるために、三日目に復活されたことを。そのことを信じます。アーメン」という、わたしたちの信仰の応答をするべきであります。祈りましょう。

祈り

主イエスさま。この日本の多くの人は、イエスさまが偉大な宗教家であったこと、すぐれた教師であったこと、神からつかわされたメッセンジャーであったことを、よく知っております。しかし、イエスさまは、それ以上のおかたであります。どうか、わたしたちの目を覆っているおおいを取り去って、十字架と復活の主イエスキリストを見ることができるように。心の目で見ることができ

るように。どうか信仰を与えてください。実に主イエスキリストは、わたしたちの罪の身代わりに十字架にかかってくださった、ということを、信じます。実に主イエスキリストは、わたしたちに永遠の命を与えるために復活された、ということを信じます。どうかわたしたちの信仰を導いてください。主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン